

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部

■発行日 2005年3月19日

■連絡先 藤川博樹

〒115-0045

北区赤羽1-48-3 ドミール藤203

tel03-5249-5797 fax03-3901-6090

■編集 塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.281

4月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ：5枚 (2000字)

小説：10枚 (4000字) 目安

■ 4月16日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



ジョン王の城 (アイルランド・リメリック 2000年8月)



◆蒲原ユミ子さんの作品が掲載されました。
「ほんとうに心があたたくなる話・3年生」
日本児童文学者協会編・ほぷら社

◆やつと春がきた。すがすがしいアサツキが空にむかつて切つ先を伸ばす。畑一面にフキノトウが芽吹く。カンゾウは両手をひろげて待つている。地域の合併問題でろくろに落ちついてもらえない状態だが、春の恵みを放っておく手はない。摘み取ってきては食卓を飾る。が、ひとつ忘れていたことがある。それは、うまさにまかせてフキノトウを食へ過ぎると、うんちが固くなる、ということである。じつは、これまでは酒といっしょに食べていたから身にこたえなかったのだ。最近のわたしはめつたに呑まなくなったので、身体条件が変わっていた。それで、つい山菜を食するときの心構えを忘れていたのである。結果はかなり悲惨であった。諸氏も苦味を味わう山菜には注意されよ。もつとも、この春、わたしがフキノトウを採集したのは、通算で箆にいったばい5杯なのだが。(K)

●埼玉在 余田浩司郎さん お便りと切手80円×60枚 ありがとうございます。とうございしました。

●都内在 菊池恩恵さん お便りと切手ワンシートありがとうございます。

トランス・ヒューマン

蒲原直樹

混沌市には季節があるようでない。風は冷たくなったり熱くなったりするが、それによって人々の価値観が変わるわけではない。

同じように混沌市には人情があるようでない。客観的には田舎のようでも、もう住民の心は二十年も前に、そのへんの大都市以上に薄っぺらになっている。そうは言っても老若男女が暮らす町並み、それなりに男女の色恋沙汰があるもはや人間らしい行動、といったらそのくらいしか残っていないかのようだ。

敷島慎一がその美女を見たのは、混沌駅前歩道『ステーション・アベニュー』だった。たまたまその時デートをドタキヤンされたところだったので、することもない慎一はフラフラと女の後をついて行った。

アベニューというにはコ汚いゴミだらけの道を通りすぎ、美女はデパートのエントランスを入っていった。慎一はそれを追いかけたが、階段の側で女を見失ってしまった。階段の下に女性用トイレ

の表示がある。多分、彼女はそこに入ったのだろう。

慎一は壁にある時計を眺め、イライラしながら待ちつづけた。しかし美女は現れなかった。二十分が過ぎ、ふと見るとハンサムな青年が出てきた。顔立ちも背格好もさっきの美女によく似ている。しかしこちらは男性だ。慎一はじつと青年の顔を眺めた。その前を、青年は慎一に目もくれずに早足で通りすぎた。慎一はそれからまた十分待ったが、ついに目的の美女は現れなかった。

慎一はトイレに降りてみた。そしてそれが「女性専用」であることを確認した。男性用は階段を登った、上の踊り場にあったのだ。

「あいつ、変身したのかも……」
慎一は驚愕しつつもひどく興味を曳かれた。

それから彼はつとめてそのデパートの周辺を歩くことにした。慎一の身分は一応「大学院生」ということになるが、たいした大学ではないので就職浪人と変わりはなかった。しかし暇だけはたっ

ぷりある。もともと通勤に使うだけの駅だったが、毎日歩いてみて面白みのない場所だな、と彼はあらためて気がついた。昔は各地から若いミュージシャンが集まってきて、「ミュージック・シテイ」などと呼ばれたこともあったのに、わざわざ駅頭にでっかいディスプレイと大音響のスピーカーをつけて若者たちを追い払ってしまった。せつかくの町おこしのチャンスを棒に振るなんて、市長も商店会長も何を考えているんだか、馬鹿につける薬はない、と慎一は思いを巡らす。

その時、前に見たあの青年がすぐ側を通った。慎一はすかさず後を追った。彼はあのデパートを指して歩いていた。

慎一が追いかけていることを知って知らずか、青年は階段のほうへ近づき、今度は上の男子用トイレに入っていた。慎一はそれからまた二十分、黙って待った。するとこの前の美女がキョロキョロしながら男子トイレから出てきた。彼女は慎一を見て一瞬ギョツとしたが、次に激しい目つきで睨んだ。慎一は何か言おうとして、その鋭い視線に会うと喉が引きつってしまつて何も言えなかつ

た。黙り込んだ慎一の前を美女はハイヒールの音を高く響かせて通りすぎた。

もうまちがいない、あの美女はミスター・レディーか男装趣味のある女性のどちらかに違いない。そうは思ったが、慎一は自分が美女に弱いことを自覚した。あの切れ長の綺麗な瞳で睨まれて、心臓が口から飛び出しそうになった。とても女の方には声をかけられない。彼は計画を練った。

突然声をかけてきた男に、青年はびつくりした様子だった。

「どこかでお会いしましたっけ？」
つぶやいた声はちよつと震えるテノールだった。後ろには夕方の雑踏がある。

「いえ、あなたは僕を知らない。でも、僕は君を知っている」

「どういうことですか？」

「南野弘明くん、混沌大学の一年生、韮崎町のアパートに住んで通学している真面目な学生だが、裏の顔がある。夜はスナックで女性のジュリアちゃんとしてアルバイトをし、学資を稼いでいる二重生活者……」

おれたちの村

④

蒲原ユミ子

3 ハプニング

陽平は堀の石橋をわたり、お屋敷の玄関の前に立っていた。後ろで、健人が陽平のジャンパーのすそをにぎっている。

陽平は石橋では遊んだことがあるけれど、1年中開けられたままの長屋門から中へ入るのは初めてなのでどきどきしている。呼びリンはない。だから、自分で言おう。

「こんにちは」

ちよつとかすれてしまったけど、大きい声を出したつもりだった。家はしんと静まり返っている。陽平は待ちながら庭を見た。藁がほころびかけた桜、築山に植わっているドウダンツツジやサツキは春の光をあびて元気そうである。日なたは土の見えるところもあるが、日かげはまだたつぷりと雪が残っている。大屋根の下は数メートルの雪山である。

じいさまがあらわれないので、陽平は思い切り息を吸ってから言った。

「こんにちはっ!」

すると、白壁の土蔵の方からムサシがまっしぐらにすつとんできた。健人はかたくなつて陽平の後ろにかくれた。ムサシは近づくと大よろこびで陽平に前足をあげ、全身をあずけてきた。陽平は両手両足を広げぐわしつとふんばつてムサシをだきとめた。少しよろけたが、なにしろ、ムサシは後足で立つて伸びると陽平より大きい。ムサシが陽平にとびかかったしゅん間、健人はお兄ちゃんの間、ジャンパーから手をはなしたが、またすぐつかんだ。お兄ちゃんからはなれている方がもつとこわいから。ムサシは、ころと陽平の顔をなめまわす。

「よせよ、顔は、くすぐつたいぜ」

陽平はしかりながらムサシの頭をなでた。そこへ、

「待たせたな」

と言って山村のじいさまがあらわれた。着なれたふうの紺の和服姿である。ムサシはじいさまの足元に行つて腰をひくめ、命令を待つつかつこうをした。じいさまは陽平の後ろにかくれている健人を

見た。

「弟かい?」

「はい」

陽平は元気良く返事をし、しりごみする健人を自分の前におしだした。

「ちゃんと自分の名前を言つてあいさつしな、あしたから1年生だぞ」

健人はもじもじしながらちよつと頭を下げた。

「けんとです。こんにちわ」

じいさまは目を細めた。

「こんにちは。けんと君もよろしくたのむよ」

健人ははずかしそうにこくりとうなずいた。じいさまはムサシの頭をなでながら陽平に言った。

「こいつは門から出ないようにしつけてある。庭に雪が残っているけれど、好きに遊んでおくれ」

「はいっ」

じいさまはたもとからテニスボールのような緑色の球を取り出して差し出した。

「ムサシは球ひろいも好きなんだ」

「はい」

陽平はしつかり受け取った。

「じゃあ、お前さん方の好きなだけ、お願いするよ」

「オッケーです」

陽平はこんな立派なお屋敷の大人に、こんなにきちんと用をたのまれるのは初めてなので、すごく気持ちがいいってきた。じいさまの鋭い目がなごみ、白いひげの中の口元がゆるんだ。

じいさまは家にもどり、2人と1匹は向き合つた。健人はやはり陽平の後ろにかくれているけれど、ムサシはうれしそうに陽平を見上げさかんにしつぽをふっている。陽平の手のボールも見えている。

陽平は自分にまかされた遊びという仕事を、心の中で、

(よおし、たのまれたんだからな)

と、うれしくかくにんした。それから、ボールを空中に放り自分で受け止めてみた。ゴムのボールより固いけど、ムサ

シが口にくわえやすい固さだろう。4・5回手ならしてからムサシを見た。

「じゃあ、いくぜ！」

はじめは、空中にちよつとだけ高く投げた。ムサシは軽くジャンプして落ちてくるボールを高い位置でくわえた。そして、(こんなの、かるいですよ) という目で陽平にさし出した。

2回目。陽平は春の空に向かって思い切り投げた。ムサシは走り、高くジャンプした。

ナイスキャッチ！

なごり雪をけてって青空にとび上がり、タマをくわえ、雪上にまいおりの黒犬ムサシ。それがスロモーションの連続写真のように陽平の目に焼きついた。陽平はぼかんと口を開けて見とれた。

「すごいな、ムサシ・・・」

もどつて、ボールを返すムサシに陽平は心の底からほめた。ムサシもクンクン鳴いてうれしがる。

健人もムサシのかっこうよさにびつくりした。そして、ムサシはほえない犬で、あんななお兄ちゃんになれているということにほつとした。でも、自分からはとても近づけない。息がびつたり合った2人を、ちよつとはなれてうらやましく見ていた。

そのうち、健人はお兄ちゃんやムサシ

を見ていただけのことにあきてきた。2人はボール投げをやめて雪の上をいっしょに走ったり転げ回ったりしているけど、健人はその仲間に入れないし。それに、せつかくのチャンス。こんなに広くて木や石が庭園のように並んでいるお屋敷に入れたのだ。健人はそろそろと歩き出した。

まず、空に枝を高く伸ばしている銀杏の木に向かった。これはお屋敷の外からも見える1番背の高い木だ。健人はとけかかった雪の上を黄色い長ぐつでそろそろ歩いていく。

健人の胴より太い銀杏の幹にそつとさわつた。こわこわの手ざわりなのに、あつたかい。次は、馬のせなかのように登りやすそうなモミジの木もおもしろそう。

梅や桜の木もさわっているうちに、大屋根の下にたまっている雪山に近づいた。大人の背丈よりずつと高い。健人はこの雪山のてっぺんから庭を見下ろしてみたくなつた。

(たかいところからみたら、きもちいいだろうなあ・・・)

(つづく)

宇宙のささやき その6

悲 愴

藤川博樹

高校に進学したときの芸術科目の選択で、音楽をとつた。それは偶然だったが、友人や趣味などその後の人生の上でも大きな影響があつたように思う。同じクラスになつた友人たちから影響を受け、レコードを聞くようにもなつた。

福田君は、出席簿の名前の順番で私のすぐ前だつた。したがつて、一学期の最初は隣の席だつたし、音楽室や生物の階段教室では常に隣の席だつた。

私は音楽的な感覚がすぐれているわけでもなく、楽器も弾けなかったが、なんとなく友人たちの影響を受けて、音楽室に顔を出したりした。例によつて、音楽室には全国どここの高校の音楽室でも

そうだろうが、大きなスピーカーがあり、アップライトピアノが置いてあつた。

昼休みなど、音楽室にたむろしている連中がいて、ピアノを弾いている。ある日、2年生の眼鏡をかけた先輩がバツハの二節を弾いていた。そこへ、福田君が音楽室の入り口から入つてきた。決闘に向かう西部劇のガンマンよろしく、両脇にぶら下げた手のひらの指先をうごめかしていた。すぐにも2丁拳銃をうちばなしそうと構えた前かがみの姿勢はガンマンそのものだつた。一直線にピアノに向かうと、先輩が席を立ち、福田君は当然のように椅子に座り、荘重に一発目の和音を弾き鳴らした。

「悲愴だ」と、先輩がつぶやいた。白哲の福田君は、なおいっそう顔色が青ざめ、まさに悲愴な決意を持つて、ベートーベンの八番ソナタの序奏を弾きだしたのだ。その間、二分ほどなのだが、音楽室の空気が張りつめていた。序奏は無事に終わり、福田君は立ち上がると、きたときと同様な前かがみの姿勢で、両腕を垂らし、指先の訓練をおこたらずに動かし続けながら、音楽室を去つて行つた。先輩は、ポケットから懐中時計を取り出し、昼休みの残り時間を確かめた。福田君が、悲愴の全曲を弾けたかどうか

かはわからない。どちらにしろあの腕前ならすぐに弾けるようになったに違いない。しかし、彼は悲愴の全曲を弾くことはなかった。彼はまもなくピアノをやめてしまったからである。

二学期の終わりは、創作曲の発表が試験課題だった。福田君が気合を入れて準備し、相当の思い入れで曲を準備したことは言うまでもない。曲はベートーベンの出だして始まった。急速にテンポアップし、定型的な指遣いでピアノの鍵盤を上り詰めていく。嵐のような旋律、鍵盤を右の端まで、つまり高音部まで上り詰

めると、最後の位置音を「ピン」と強烈に強調してたたき、打鍵した瞬間、彼の右手ははるか頭上まで跳ね上がった。あまりにも大げさな音階と身振り、最後の高音のはねあがり、みんな思わず笑った。そして、福田君の両手は、モーツァルトのようにベートーベンのように低音へ高音へと鍵盤を駆けめぐった。そして、やや不安定な下属音の和音を鳴らし

て停止した。
しばし、沈黙の後、「わあーっ」という歓声があき起こりクラスのみんなは一斉に拍手した。

あまりの迫力とテクニックの冴えに

先生も思わず苦笑して、黒板の前に立ち、福田君が黒板に書いたこまかい音符を追いながら批評した。しかし、聴衆を沸かせたその音楽的な効果は圧倒的であつて、先生が何を言おうとその音楽は無を言わせぬ説得力があつた。音符を最後まで追つた先生は、「この曲は終わってませんね」と言った。私の隣の自分の席に戻つてた福田君は、「はい、これは序奏ですから」と言った。聴衆からあらためて感心したため息が出た。

先生は、「これからいつそう精進しなさい」としめくくつて、次の生徒の作品に移つた。

そこで、出席番号の順番で私の出番なのである。私がピアノに向かつて歩いていくとなぜか生徒の中から笑いが漏れた。同情の笑いである。福田君の後に誰がやつても、はじめなのは分かりきつてゐる。それにもまして、私が黒板に書いた創作曲は、調性無しというより、なにも考えていなハ長調の曲で、しかもほとんど二分音符のゆつたりとした上昇と下降の連続だけなのである。その音階に、習つたばかりの和音の展開をつけて、和音の連続を打ち鳴らしていくと何か厳かな宗教的な雰囲気が出る。そうとう後になつてからの後知恵でこじつけると

一種のコラールのようなものである(こじつけすぎだが)。そのシンブルな曲を弾いているとなぜか教室の中が静かになつた。

先生は、「これは四分の四拍子というより二分の二だな」といつてCの記号に縦に棒線弾いて半分に切つた。そして、ピアノでなく声で歌つてみなさいといつた。それから、みなさん歌つてみましようといつて、クラス全員で歌つた。ハ長調で、シャープもフラットも一つもなく、音域が一オクターブにおさまつてゐるから、実に簡単に声に出して歌いやすい曲だったのだ。

私は身が縮む思いがしながら、自分の席に戻つた。そしてその日の授業は終わった。

それから二、三日して隣の席の福田君が、昨日家にピアノが届いたという。おう、良かったな、これからたつぷり練習できるなと私がいうと、福田君はピアノはもう止めたんだという。え、どうして。

「ピアノはもう二人に一人が弾ける時代なんだ。早川を見る」と言う。

早川さんは、音楽の時間、先生がひかないときには代りにピアノを弾いて、クラスの合唱の伴奏をしていた。福田君の

ようにかっこよくもなく、見栄も切つていないが、本当に一生懸命弾いているのがわかる演奏だった。

三人に一人が弾けると言われて、私はなんとなくそんなものかなと思つたのだが、考えてみれば、ピアノが弾ける人が多かるうが少なかるうがそんなことは関係ないのではないか。

私は、「あれほどの曲を作曲する腕前があるのにもつたいたいじゃないか」といつた。福田君は、「いや、そのあとの君の曲の方が素晴らしかったじゃないか」といつた。たしかに、福田君の大見得をきつた派手な演奏の後の、私の曲はあまりにもシンブルすぎた。それにしても、福田君がピアノを止めるといふ理屈はよくわからない。しかし、断定的な迫力に押されて何となく納得してしまふというのが、一六歳の高校生の常なのである。あれから三五年も経つてしまつた今では理解できない心の動きによつて、私は、うんそうか、ピアノはもう珍しくないから止めるのかと納得してしまつた。

それから、次の休み時間に、福田君は「しかし、俺もなあ、ピアノ買つてからピアノをやめるなんてなあ」と私に聞かせるともなくつぶやいてゐた。

買ったばかりのピアノももつたないが、福田君の才能ももつたいなかったと、今の私は思う。しかし、その後、福田君がピアノに戻ることはなかったと思う。

早川さんは、その後音大に進学したから、本当にピアノと音楽が好きでずっと音楽にかかわっていったのだと思う。それから翌年だったか風の噂で、福田君が他の高校に転向したと聞いた。それから何年かして、大学前の駅のプラットフォームで福田君とすれ違った。

「福田」と声をかけると、お、〇〇と、私の名前を覚えていてくれた。しかし、一年生のときに隣の席だったときから、何年もすぎ、互いの心が離れすぎていて、近況を語り合うこともなく、彼がピアノをやっているかどうかは聞きそびれてしまった。彼はうつむいたまま、駅の改札を出て大学の方へ向かっていった。

ペーターベン ピアノソナタ八番
「悲愴」 ヴィルヘルム・バックハウス

遙かなる戦火

内田幸彦

(二) 兵隊さん

徳川幕府が倒れ、明治政府となり、国民皆兵制度——つまり、健康な男子は二〇才になると三年間の軍務に服する義務を負う制度が作られた。俗に「兵隊検査」というものを受けるようになったのである。

陸軍と海軍、それに空軍というのがあつた。日本の空軍は独立したものでなく、陸軍・海軍の一部としてあつた。

海軍は艦船の数に限りがあるところから、陸軍に較べ、人員も少なかつた。俗説かも知れないが、体の大きい見目形のいいのを選んで聞いている。

海軍将校は白の軍服を着て短剣を腰にし、男でも震いつきたくなるような垢抜けたスタイルだった。

兵隊検査を受けると甲種・乙種・丙種に区別され、平時に入隊させられるのは甲種のみだったが、戦時になると乙種は勿論、第二乙種・丙種まで採用を掛け、招集した。

太平洋戦争に入ってから、兵隊に行

かないのは病人か不具者のみと言われる程、男が不足した。

陸軍では二等兵・一等兵・上等兵・兵長・伍長・曹長・少尉・中尉・大尉・少佐・中佐・大佐・少将・中将・大将・元帥の階級があつた。海軍の方は陸軍に較べて入隊者も少なく、詳しくは知らないが、陸軍に準じた階級があつたと思われ

る。兵隊検査を終え、一応、現役の三年を務めると除隊となり、予備役に編入された。兵隊検査を受け、初めて入隊する時を「入営」と言い、情勢の変化などによつて二度目に呼び出される時を「招集」と言つた。

陸軍には歩兵・騎兵・砲兵・輜重兵・補充の兵科があり、それに応じて「歩兵操典」「騎兵操典」などの教典があつた。

戦争が長引くと、兵員に不足を生じ、志願兵を追加募集した。陸軍では現役兵の他に、陸軍大学・陸軍士官学校・陸軍幼年学校に加え、特別幹部候補生を新設し、戦力を補充した。

海軍も、海軍大学・海軍兵学校の他に、飛行兵として、予備学生・予備練習生の制度を設け、若人の憧れの的となつた。しかし、現実には飛行機に乗れたのは第一回の志願兵のみで、第二回以後は防空壕掘り、基地の整備など、土木作業に終始したという。

日本は軍事力による国土の拡張、すなわち侵略を目的としたため、国内の政策も尚武を旨とし、国民の戦意昂揚を計つた。教育勅語を基礎に、君(天皇)に忠、親に孝、夫婦・兄弟仲良くとの政策は浸透し、当時の若者は皆洗脳され、死ぬ気でいた。純粋な愛国精神に溢れていた。神風特攻隊その他の決死隊には従容として死地に赴いた者もいた。

敗戦後、国民は経済の低迷と、急変した世相に一時戸惑つたが、間もなく世の落ち着きと共に、身に付いた軍人精神・大和魂を根源に、世界の経済大国にのし上がった。それを戦前派・戦中派の男達を中心になしとげたことを忘れてはならない。

軍国主義を讀める気はない。しかし、そこには学ぶ所も少なくない。平和・自由もいいが、過度の自由は害毒を流し、現代の乱れを招いたと言つても過言ではない。

近藤泰寛君のこと (一) 中井 豊

この二月二六日(土曜日)、電話があり、「林です。」

と言う。一瞬、誰か判らなかつたが、近藤君の妹だと気付いた。

「今朝、兄が亡くなりました。」と静かに言った。

近藤泰寛君とは私が大阪市立大学に入つて間もなく知り合つた。当時は大学紛争というのが激しくて、講義どころではなかつた。オーケストラの部室へ行ったところ、同じ理学部数学科だということで紹介されたように思う。彼はヴィオラを弾いていた。一浪して大學生になつた彼は、二浪した私と高校を卒えるまでの学年は同じでも、大学では一つ上であつた。

彼は大阪府立今宮高校の出身で、家は大阪市西成区岸ノ里にあつた。私の家族は和歌山県中部を流れる日高川のほとり——和佐駅の国鉄宿舍に住んでいた。ここから大学へ通うことは出来ないで、私は大阪市東住吉区の南田辺という所に下宿していた。

無聊を慰めるため、私は近藤君の家へよく行つた。時には一週間くらい彼の家でゴロゴロしていた。下宿は食事つきだったが、どう

も彼のお母さんの料理を皆で食べる方がよかつた。いつしか下着の洗濯までしてもらふようになった。

近藤家は四人家族で、家は二階建てだつた。二階に彼の部屋があつた。

お父さんの名は近藤庫之助といつた。船場の良家に生まれ育つたそうだが、当時は薄給で小さな会社で経理を担当しているようだつた。髪は既にきれいな純白だつた。絵が好きだという無口な人で、ビールを飲みながら一緒に夕食を囲んでいる間中、赤い顔をして上機嫌だつた。わが子達を心から愛し、ニコニコと見守るだけの人で、それが居候の私にも心地よかつた。私は何とはなしに忠臣蔵の大石内蔵助を連想した。お父さんの立派な性格は近藤君に継承されたに違いない。

お母さんの実家は和歌山の紀三井寺にあつた。和歌山出身というだけで私は親しみを覚えた。一度だけ、実家へ案内されたこともある。内職に封筒貼りをしていて、私も面白半分によつてみたが、直ぐに飽きた。お母さんは音楽が好きだつた。音楽の話をするうち、ステレオを買おうということになつた。代金を立て替えてもらい、私がアルバイトをして支払うということになつた。お母さんと私は

このステレオでショパンの『ピアノ協奏曲第一番』のレコードを何度も聴いた。

実は近藤君が生まれる前に男の子が一人いたらしい。この子が産まれて間もなく亡くなつたことが、お母さんの心に深い傷を残して、晩年になつても時折そのことを洩らした。

近藤君は出かけるのが好きだつた。どこへ行くのか、私は知らなかつたし、知ろうもしなかつた。家が貧しいからと笑ひ、工場の作業や家庭教師のアルバイトをしていた。

彼には千賀子さんという三歳下の妹がいた。私の妹と同じ歳だつた。彼が家にいる時は二階に、いないときは二階に泊めてもらつた。彼がいないとき、四人で川の字になつて寝た。

一度、近藤君、彼の妹、私、私の妹の四人で南紀旅行をした。和歌山県新宮市に家があつた私の友人宅に泊めてもらつて、田舎の海や川で泳いだ。三日ほど一緒に過ごした後、南紀の自然がすっかり気に入つた彼は、さらに別の友人を訪ねたいと言ひ出した。仕方なく、私は妹と千賀子さんを連れて和佐の家へ帰つた。妹と千賀子さんは別に親しいわけでもなかつたが、兄一人は頓着しなかつたのである。この時、千賀子さんは我が家に二、三泊して、追いついた近藤君と一緒に大阪へ帰つた。何故か近藤君自身は我が家に泊まらず、慌ただしく帰つた。

もともと千賀子さんは高校を出て、就職す

るはずだつた。ところが、「女は大学へ行かねばいかん。勉強は僕がみてやる。」

と私が言い出したため、進学することになつてしまつた。

後年、近藤君が姪達に、「千賀子は泣きながら勉強させられとつた。」

と述懐すると、当人も娘達に、「ほんまやで。」

と言つた。そんなことがあつた。

大学三年の年末、近藤君は友人と和歌山県の新宮市へ自転車旅行に出かけた。風邪気味だつたのに、それを押して雨の中を自転車であつたらしい。この風邪をこじらせたのが原因で彼は南大阪病院に入院し、当時めづらしかつた人口透析の手術を受けた。

手術に際して、理学部やオーケストラの學生がこぞつて献血した。私も病院に泊まつた。

透析を始めた彼の未来は闘病の一生と定まつた。私は時々病院を訪れるだけで、何もして上げられなくなつた。

千賀子さんは勤めながら三年制の夜間短大を卒業した。その傍ら、兄に代わつてオーケストラでヴィオラを弾いた。(つづく)